

# Spenser の *A View of the Present State of Ireland* : 古典植民論の問題

Spenser's *A View of the Present State of Ireland* : Problems of Old Colonialism

祖父江 美穂

Miho SOBUE

## 1

ポスト・モダニズムが主流になり、植民地問題への関心がポスト・コロニアリズムとして脚光を浴びて久しい。それに伴い Edmund Spenser (1552?-1599) 研究も *A View of the Present State of Ireland* (1598, 以下 *A View* と表記する)<sup>1)</sup> に焦点をあて、新たな局面を迎えている。Andrew Hadfield や Willy Maley による Spenser とアイルランド植民地問題に関する研究は、従来の Spenser 研究に新たな地平を提示した。ポスト・モダニズムの一翼であるネオ・コロニアリズムが *A View* に焦点を当てて以来、Spenser 研究は文学や歴史ばかりでなく文化論として領域を広げた。「詩人」Spenser によって書かれたこの散文は、従来は資料的価値に重点がおかれていた (Hadfield and Maley, xv) が、今日では積極的に取り上げられ、Spenser 詩作品の新しい解釈を喚起している。こうして今日では *A View* それ自体が独立した価値あ

る植民論となっている。

16世紀末に書かれた *A View* は、ジャンル分類が難しい。歴史書ではなく、政治書、法律書でも、また風俗書でもない。確かに *A View* においてこれらの記述は詳細になされている。人種系統、風土、慣習、法制、軍事など多方面にわたっている。これはルネサンス特有の折衷であり、現代では "hybrid" (雑種) と呼ばれる多様文化論である。Henry VIII 以降、複雑となるアイルランドを時代背景として、Spenser は何を見つめ、その視線の先に何をとらえたのか。

*A View* は対話形式であり、中央政府より派遣された Ireneus の発話を基軸に中央政府官僚の Eudoxus の質問とコメントで進められる。David J. Baker は 2 人の会話をケケロ風であるとし、Ireneus は Eudoxus の質問に答えながらも終始一方的に会話の主導権を握っており、彼の言説の中に Spenser の意見が代表されているとする (79)。しかし William Allen Oram も指摘するように、説明と説得側の Ireneus の発言は作者 Spenser 自身の見解そのものではない (16)。相対する Eudoxus が納得し同意する箇所には、Spenser の主張の核心がある。これが *A View* の対話

1) 本論においてテキストは Sir James Ware の編集によって1633年に出版されたものを底本とした Hadfield and Maley eds., *A View of the State of Ireland* (Oxford: Blackwell, 1997) を使用するが、タイトルは従来の *A View of the Present State of Ireland* と表記する。

形式の基本であり、記述ではなく説得である。この説得形式は、当時のキリスト教説教術(Homily)が範例と言えよう。<sup>2)</sup>そしてこれらの説教文書が今日では批判されているのと同様に *A View* にも冷静な対応が必要である。

イギリス絶対王政の君主 Elizabeth I (1533-1603) は1580年に Arthur, Lord Grey de Wilton (1536-93) をアイルランド総督として派遣した。その秘書である Spenser の手になる *A View* は、中央政府のアイルランド植民の最前線に立つ。このコンテクストから *A View* は公的なものである。*A View* は、資料の広さと分析の深さ、記述の正確さによって、当時の植民論の古典的価値を持つ。これが後に John Milton (1608-74), William Wordsworth (1770-1850), W. B. Yeats (1865-1939) らに読まれた理由であろう。

## 2

*A View* の前半は、アイルランドの現状がいかに悲惨であり、かつ見通しが無いという悲観論である。前半のテーマは、植民宗主国イギリス政策立案者が直面するアイルランドの治し難い後進性であり、後半になって武力制圧の帰結となる。*A View* の植民論の古典的価値は、理論だけでなく Oliver Cromwell (1599-1658) によるアイルランド征服によって実現される。古典性はリアル・ポリティックによってより価値あるものとなる。この歴史実証において、*A View* はイギリス植民主義の展望と言えよう。では、Spenser が武力

による植民地制圧と支配という政策をいかにして導き出しているか検討しよう。

アイルランドの現状からの改革は何によって達成されるのか。Eudoxus は法整備やそれに伴う厳しい罰則によってアイルランドの人々を秩序ある状態にすべきであると主張する (92-93)。これに対して Irenius は武力行使を主張し、その理由を以下のように説く。

これら全ての悪は、良いものが移植される以前にまず最初に強力な手段で取り除かれなくてはならないのだ。 (93)

「これら全ての悪」は植民地政治を妨げるものである。イギリス側からどのような良い制度を「移植する (plant)」よりも、まず悪いものを全て排除しなくてはならない。Irenius はこれを果樹の栽培に例える。すなわち「悪 (evils)」は腐った小枝や病気に罹った太い枝、木に付着する苔である。枝はすっかり剪定され、苔もきれいに取り除かれて初めて木は良い実を結ぶというのである (93)。悪いものは強制的かつ物理的に除去しなくてはならない。

ここで注目すべきは "plant" という語である。ある場所へと人を定住させる「入植者 (colonist)」という意味での "plant" は、*OED* によれば、14世紀から使用されている。そして "colonialism", すなわち「植民地支配」に関しては、同じく *OED* によれば、元来ローマ人がローマ以外の新しい地に住みつき、共同体を形成しつつ、なおかつ本国との関係を保っていることを指す。ローマによる古典的植民地支配の形態である。Ania Loomba が厳しく指摘するように、この定義には先住民の影は見いだされない (1-2)。

前掲の引用部分、Irenius の言説において、"plant" は植民地入植を指し、その後続けて

2) Spenser による他の作品において見られるこの形式は、例えば *The Faerie Queene*, Book 1 Canto 9 での Despair と Redcross Knight の対話の場面、Canto 10 での Contemplation と Redcross Knight, さらに Book 2 Canto 7 での Mammon と Guyon の場面などがあげられる。これらの対話と説教との関連については Mallette を参照。

述べられる果樹の比喩と呼応する。16~17世紀に活発になる「新世界」"plantation" の前哨を彷彿とさせるものである。今、Irenius は "colonialism" のため、"plant" よりも先に "evills" の除去の必要性を、しかも武力という手段で訴えている。ここで、Irenius の主張では「武力」と「入植 (plantation)」が不可分なものとなっている。では Irenius の指す植民地支配を妨げる "evills" とは一体何であろうか。

Irenius はアイルランドにはびこる数多くの野蛮な風習の存在に言及する。彼はガリア人が敵の血を飲み、その血を体に塗るという習慣があったことを述べる。Irenius 自身が Murrough O'Brien の処刑後、乳母である老女がその切り落とされた首を取り上げ、流れ落ちる血をすすり飲んだのを目撃したと証言する。大地は彼の血を受けるに値しないと言うのが彼女の言い分である (66)。

その理由は何であろうとも、Irenius の証言は、アイルランド人が野蛮な文明化されていない民族であることを前面に出すものである。彼はこの地に住む人々の人種とその構成の背景となった歴史を、バード (詩人)、アイルランドの年代記、現地において耳目に触れることのできる記念碑のような証拠から、さらに Caesar, Strabo, Tacitus らによって書かれた歴史に関する記述を紐解き、綿密に再構成する (46)。

その結果、Irenius はこれらの資料を駆使することによって次のように推測する。すなわち現存のアイルランド人は、アイルランド北部に定住したスキタイ人、西部にスペインの地からやってきたスペイン人、ガリア人が南に、そして東部にイギリス人が住み着いて成り立った (52)。邪悪な風習はこれらの複雑な構成の中から誕生したと彼は推測する。悪しき風習がアイルランドに蔓延し、そして

アイルランドそのものを悪くしている。

Irenius は悪しき風習を列挙する。まずスキタイ人によってアイルランドにもたらされた牧畜と遊牧生活についてである (55)。彼は、牧畜そのものはアイルランドの風土に適応し有益であるという。しかし、遊牧民の中には放埒で野蛮なものが多く存在する (55)。また、彼はスキタイ人の習慣からもたらされたマントにも言及する。これは防寒や防霜を目的とし理にかなったものであったにもかかわらず、目深に覆い被さったマントの姿が見た目にも恐ろしく、また武器を隠し持ち戦闘時において悪用されている (56-58)。さらに大声の習慣も反乱時の事例と結びつけて示される (59)。この他にもガリア人起源とされる髭や、彩色の施されたなめし革の小楯などがあげられる (65)。これら全ては近代化を遂げていないアイルランドの後進性の例とイギリス側は見なしていた。

もう一つの後進性として Irenius は2つの名家の例を述べる。すなわち Henry II の時代以降アイルランドに定住した、いわゆる旧植民者 (Old English) の中でも最有力の Geraldines と Butler である。アイルランドにおいて両家による権力闘争が続く中、彼らは今ではほとんどアイルランド人に同化してしまったと Irenius は糾弾する (68)。それを受けて Eudoxus も「その最初の本質からそんなにも墮落してしまい野蛮になってしまうとは」(67) とその退廃ぶりを驚き批判する。ここに Irenius と Eudoxus の「アイルランド人化」に対する共通の認識がみられる。すなわち両家がアイルランドに根付きアイルランド化する。これは文化水準の高いイギリスから見れば墮落である。そのアングロ・アイリッシュがアイルランド人を使って略奪行為を行う。彼らは「今ではまさに野蛮なアイルランド人以上にもっと無法で放埒」なの

である(67)。

優位にたつイギリス本国から人や制度が移植されようとも、Eudoxusが「野蛮になってしまう」と嘆くように、それらは墮落してしまう。Ireniusの言う"evills"のはびこる現状では何も根付かない。彼のこうした詳細な記述は、野蛮な民族の野蛮な風習の例証である。すなわちこの後進性こそがアイルランドをアイルランドたらしめているものであることを証明するものである。ゆえに彼は武力で根本的に取り除くべきという見解につながるのである。

### 3

前章において見てきたように、Spenserはアイルランドの後進性がイギリス植民支配を困難にすると言う。本国イギリス文化の先進と優位に立つことによって支配を正当化する植民主義者のロジックである。Spenserはこの立場から自身が目撃したマンスター(Munster)飢饉の惨状を述べる。

森や谷の隅々まで彼ら(アイルランドの難民)が這い出てきた。彼らには立つ力も無く、その姿は骸骨のようであり、その声は墓から出てきた亡霊のようであった。彼らは死骸を食べた。墓から掘り起こしてでさえも食べた。クレソンやシャムロックを見つければ大騒ぎをして群がり、それらを食したが、すぐに食べ尽くして何もなくなってしまった。マンスターは最も人が多く豊かな地方であるのに、人も獣もいなくなった。この戦争の最中、武力によって死んだものはそれほど多くはなく、むしろ飢饉によって全滅したのだ。それは彼ら自身が作り出したものだった(101-2)。

空腹のあまり人肉を食うアイルランドの人々。野蛮な行為の極みであるこの衝撃的記述は、アイルランド人の後進性を浮き彫りにする。前述のO'Brienの処刑での血飲、そしてこの飢饉での悲惨な目撃証言も、Ireniusによる実際の「目撃」証言はみな詳細に描写されており、Eudoxusに対してアイルランドの後進性を訴える強い説得力がある。まさしく"view"の力である。<sup>3)</sup>

飢饉は「彼ら自身が作り出した」と彼は言う(102)。アイルランド総督Arthur, Lord Grey de Wiltonの秘書としてSpenserが直接出会った光景である。前述の「戦争」とは、マンスターを領有していた第15代のEarl of DesmondのGerald Fitzgerald(d. 1583)が1579年にイギリス中央政府の支配に対し起こしたものであり、デズモンドの反乱と呼ばれる。Grey de Wiltonは反乱鎮圧のため1580年7月に女王の命を受けアイルランドに派遣された。<sup>4)</sup>反乱は1583年によろやく鎮圧され、そしてそれに続いて植民が行われる。飢饉はこの戦争中起こった人災であり、アイルランド人である難民には何の責任もない。

アイルランド東南のマンスター地方は、*A View*にも記されるように農業や畜産も盛んな資源豊かな肥沃な土地であり、人口が最も多い地域である(101)。植民者が最も先に目を付ける場所であると言えよう。すでに12世紀、イギリス王Henry IIがアイルランド諸王を屈服させて以来、ノルマン・イギリス人のDesmond家の領有となっていた。そして16世紀末、Elizabeth I中央政府の総督Grey de Wiltonの植民政策の中、この地に

3) Ireniusの言説の視覚的効果については、Camino "Methinks I See an Evil Lurk Unespied": Visualizing Conquest in Spenser's *A View of the Present State of Ireland* を参照。

4) Grey de Wiltonは1582年にイギリスに帰国する。その頃までには反乱の鎮圧はほぼ見通しが立っていた。Williams 206参照。

彼らの食指が動いたのは当然である。

この反乱と鎮圧は、旧植民者 Desmond と新たに到来した Grey de Wilton との権力闘争である。<sup>5)</sup> すなわち反乱の焦点はアイルランド人の問題ではなく、新旧支配者間の利得問題である。換言すれば宗主国イギリスと植民地アイルランドの直接対決ではなく、マンスター地方の旧植民者 (the Old English) と新植民者 (the New English), すなわち支配を維持する旧支配者と取って代わろうとする新支配者の問題である。

結果 Desmond は敗れ、1583年11月11日に処刑される。そして第15代を最期に Desmond 伯爵家は滅び、40万エーカーもの広大な領地は没収された。その領土は総督 Grey de Wilton に従った新植民者たちに分配される (Williams, 298)。マンスターの土地は、中央政府に対する抵抗勢力であった旧植民者の手から忠実な新植民者の手に委譲されるのだ。Spenser 自身も1589年にコーク (Cork) 地方のキルコルマン (Kilcolman) に3,000エーカー以上の土地とノルマン時代の古城を手にして大土地所有者、地方小貴族の身分となる (Maley *Chronology*, 50; Judson, 128)。その後も Spenser は様々な役職を経てさらに領有地を拡大し、1598年コーク地方の長官 (Sheriff) となる。

*A View* に詳細に述べられているマンスター飢饉は、結局はイギリス植民者が作り出したものである。飢饉によるアイルランドの人々の破滅は、マンスター地方の抵抗勢力を無力化し新植民者進出に有利に働く。少なくとも半年の間に30,000人が飢饉で死んだ (Maley *Salvaging Spenser*, 59)。人間も土地も全て

が破壊し尽くされた後、そこに400人の新植民者が入ることになる。植民地官僚の Spenser の飢饉目撃報告は、単にマンスター地方の惨状を述べ野蛮なアイルランド人の後進性を強調しているだけではない。我々はこの飢饉について「彼ら自身が作り出したもの」とする Spenser の言説を、中央政府と新植民者側のストラテジーの表出としてこのコンテキストの中で理解すべきであろう。

しかしながら彼が *A View* において記述した事実は正確である。歴史的事実として客観的でありその資料価値は十分にある。アイルランド人のカニバリズム報告は、植民者側のさらに恐るべき非人道的な武力使用を逆に浮き彫りにするものである。McCabe は、Spenser はこの最近の歴史の恐怖を単に再現することを計画しているのではなく、それをも越える計画をしていると述べている (117-18)。

この戦争で武力と飢饉が新植民者にとってどれほど有利に働いたか。マンスターからアイルランド人を武力によって根絶し、続いてそこにイギリス文化を人と共に「入れ植え付け」る。Spenser が *A View* で述べる、武力による後進性の排除と続く植民そのものである。飢饉はアイルランド人が作り出した自業自得の結果という Spenser のこの見解は、彼自身の出世栄達につながる新植民主義者の自己正当化である。

*A View* には武力による破壊と制度移植という植民地政策の基本路線が Spenser によって見事に、かつ明確に提示されている。アイルランドはマンスター入植、さらにアルスター (Ulster) 入植などにより着々とイギリス化が進む。しかしマンスター入植は土地が荒廃しつくされ、思った以上に収益があがらなかった。さらに機会があるごとにアイルランド人はスペインと結び反乱を起こそうとする。こ

5) Hadfield は、この戦争を土着のアイルランド人と新植民軍とのものとする。土着アイルランド人は戦争と飢饉にさらされ、罪もなく殺され、ひもじさのために人肉を食するようになったという。(Hadfield 67-69)

のような中で Spenser の死から50年後、アイルランドの完全支配というプロジェクトはピューリタン革命後、Spenser の「理想的読者 Cromwell」(Lim 193)による革命政府によって実現される。ピューリタンの精神力、革命政府にかけてロンドンの新興ブルジョワ階級がつき込んだ豊富な資金力、そして王党派軍を破った兵力、これらの3つの力が一気に集中した革命政府が積年の難題を一気に解決する。ここに Spenser の *A View* が植民地政策の古典として見ることができる。そしてイギリスの完全な植民地としてアイルランドは20世紀まで支配を受けることになる。

## 4

Spenser の文学とアイルランドでの経験は厳密に区別されるべきであるという C. S. Lewis と W. B. Yeats に代表されるかつての主張に対し、Hadfield は「全テキストにみざる当時の先入観」(51)であったとする。Spenser の全作品と生き方を統一し、この中で個々の作品解釈を行うのが今日の主流である。

北アイルランドのティローン (Tyrone) 伯爵領の正統相続人を主張する Hugh O'Neill (-1616) の反乱が1594年に始まり、1598年に勝利する。Spenser の領有地であったキルコルムは略奪され居城も焼き払われ、失意の中イギリスに戻る。植民官僚スペンサーは10年たらずで全てを失う。1599年、Ben Jonson (1572-1637) によれば、翌年 Spenser はパンをも欠く中ロンドンで死去する (Judson, 198-99)。

キルコルム領有時期の最も華やかな1590年代、*The Faerie Queene* (1590-1594), *Amoretti and Epithalamion* (1595), *Fowre Hymnes* (1596), *Prothalamion* (1596) などの傑作が

この地で創作される。*A View* は1598年以前に書かれたが、ステイショナリーレジスターに登録されながらも出版は果たされなかった。Sir James Ware (1594-1666) が出版したのは1633年、死後30年後であった。しかし書かれた当時、原稿は回覧され注目された (Hadfield and Maley, xi)。旧植民者 "Old English" のようなイギリスとアイルランドの複合体であるのと同時に本国イギリスに土地と地位を持つ存在ではなく、新植民者としてアイルランドに済み、そこでしか生きられない新タイプであるスペンサーの視線は、常に遙か向こうのイングランド宮廷を見つめていた。

Spenser の文学は、アイルランド植民官僚である新植民者が宗主国宮廷にすがる思いで立案したアイルランド全面征服の現実論である。彼の詩作品が調和と平安のユートピアを提示しているのと対照的である。詩のユートピアと虚構は、*A View* の過酷なリアリズムを土台にしている。彼の詩作品の研究が *A View* を手がかりとして大きく進展したのはこのためである。*A View* は権力願望、富への渴望、成功のためには手段を選ばない政策案、ルネサンス・マキャベリズムに貫かれており、古典植民論の代表文献である。

## 参考文献

- Baker, David J. *Between Nations: Shakespeare, Spenser, Marvell, and the Question of Britain*. California: Stanford UP, 1997.
- Camino, Mercedes Maroto. "Methinks I See an Evil Lurk Unespied": Visualizing Conquest in Spenser's *A View of the Present State of Ireland*." *Spenser Studies* 12 (1998), 169-94.
- Hadfield, Andrew. *Spenser's Irish Experience: Wilde Fruit and Salvage Soyl*. Oxford: Oxford UP, 1997.
- Judson, Alexander C. *The Life of Edmund*

- Spenser. Eds. Greenlaw et al. *The Works of Edmund Spenser: A Variorum Edition, 11 vols.* Baltimore: Johns Hopkins Press, 1932-49. Vol.11, 1945.
- Lim, Walter S. H. *The Art of Empire: the Poetics of Colonialism from Raleigh to Milton.* Newark: University of Delaware Press, 1998.
- Loomba, Ania. *Colonialism/Postcolonialism.* London: Routledge, 1998.
- Maley, Willy. *A Spenser Chronology.* London: Macmillan, 1994.
- . *Salvaging Spenser: Colonialism, Culture and Identity.* London: Macmillan, 1997.
- Mallette, Richard. *Spenser and the Discourses of Reformation England.* Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1997.
- Oram, William Allan. *Edmund Spenser.* New York: Twayne Publishers, 1997.
- Spenser, Edmund. *A View of the State of Ireland.* Ed. Andrew Hadfield and Willy Maley. Oxford: Blackwell, 1997.
- Williams, Penry. *The Later Tudors: England 1547-1603.* Oxford: Oxford UP, 1995.